

平成30年度学校関係者評価書

学校名 佐賀市立三瀬小学校

1 学校関係者評価実施状況

(1) 学校関係者評価実施日 平成31年2月22日(月)

(2) 評価氏名 藤野 真也 川崎 雅夫 三瀬 孝幸 大江 良二 堀 智子

(3) 資料 平成30年度教育アンケート結果、H30年度学校評価結果、学校便り

評価(ABCD)

①	小中一貫教育の計画的推進	評価	A
<ul style="list-style-type: none"> ・小中合同行事を楽しみにしている児童が96%と多い。また、その行事が児童会、生徒会が主体的に活動できるように先生方で特に配慮されている。 ・楽しみにしている児童が年々増えており、一貫校としてのメリットが前面に出て非常に良いが、一方で、中学部及び小学部高学年、さらに教師の負担となっていないか心配でもある。 ・改善策・向上策に記載されている通り、行事の見直し等も今後協議されてはどうか。 ・児童会が主体的に活動するには手間暇がかかるが、大切なことであるので、継続を望む。 			
②	学力の向上(基礎・基本の充実)と自己教育力の育成	評価	B
<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板等、ICT機器の活用により、児童の学習理解度も向上しているが、三瀬校スタンダードの取り組みや言葉によるコミュニケーション活動についてまだ不足の面が見受けられる。 ・「宿題・読書」について学校では進んで取り組んでいるように見えているが、各家庭での状況と乖離しているようにうかがえる面が見られる。 ・人数が少ないので、もう少し一人ひとりに行き届いた指導をして欲しい。 ・教育アンケートの「聞く・話す」について子どもと職員の評価差が気になる。 ・自ら学ぶ力を高める工夫が重要。周囲の大人の姿(実践力・問いかけ力)も大切である。 			
③	一人ひとりを大切にする教育の推進	評価	A
<ul style="list-style-type: none"> ・「学校へ行くのを楽しみにしている」では、保護者、児童とも肯定意見が年々上昇しており、校内で道徳の授業や人権集会の開催等、人権、同和教育に積極的な取り組みがなされている。その一方で、そうではない児童17%であることから、各家庭においても子どもの変化を見逃さないようにする必要がある。 ・教育アンケート「挨拶・感謝の言葉」の項目で、保護者、教師ともに前年度から減少している。 			
④	豊かな心を育むふるさと体験学習の推進	評価	A
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度初めて「田舎と都市のふれあい祭り」に児童たちが参加し、地域の関わる体験活動や発表などに挑戦し、また各学年で行うふるさと学習を取り組む中で「三瀬が好きだ」という子どもたちも増加してきており、体験学習の成果が徐々に上がってきている。 ・自然の中で遊ぶ機会が少ない。 ・地域とのつながりをこれまで以上に大切にしていきたい。 ・三瀬が好きだと答えていない児童16人は残念。地域住民と児童がふれあえた「ふれあい祭り」と学校フリー参観の合同開催は良かった。 			

⑤	健やかな体を育む教育の推進	評価	B
<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの児童がクラブ活動に参加し、また水泳大会、縄跳び大会やみんなで遊ぶ日の設定等、校内や校庭で元気に体を動かしている児童たちを見かける。ただ、学校評議員会でも指摘があったように給食時の姿勢や家庭での歯磨き習慣に課題がある。 ・学校では出来ていても、家庭で出来ていないとの結果がはっきりと出ている。家庭での基本的な生活習慣として定着させるためにも、保護者への呼びかけが必要。 ・「読書」「歯磨き」「整頓」「手伝い」保護者の評価が低い。家庭との協力が必要。 ・体力低下が心配。民間との連携も含めた遊べる場、機会づくりが必要。 			
⑥	業務改善	評価	A
<ul style="list-style-type: none"> ・全国的な教職員の働き方改革が大きな課題になっているなか、当校ではスムーズな職務遂行が出来ている。しかし、定時退勤推奨が週一回では、少なすぎる。 			

その他、学校に対する意見や提言がありましたら、ご記入をお願いいたします。

<ul style="list-style-type: none"> ・ひんぱんに学校と接する機会も少ないため、学校評価者として負担感がある。 ・ふるさと学習、学校便りの発行、読書指導など児童1人ひとりを大切にする教育活動に真摯に取り組んでおられる先生方に対し、敬意を表したい。今後も、「学校に行くのが楽しみ」「三瀬が好きだ」といえる子どもたちが1人でも増えることを期待したい。 ・平素の学校の取り組みが聞けて良かった。児童の下校時の見守りを考えたい。 ・保護者、子ども自らがいろいろな声を伝え合うという場を作っていくことも考えたい。
